

小説のエンパシー理論 I

——文学研究におけるエンパシー研究概観と Amy Coplan によるエンパシー理論の検討を中心に—— Theory of Empathy I

田島 健太郎
(Kentaro Tabata)

もともとそういうふうにもうと思って意気込んでいたわけではないのだが、ふと気が付けば小説世界にどっぷり没頭して、そこで生きている登場人物に感情移入してしまっていたり、その考えや感情に共感していたり、その人生をしみじみと追体験したりしている自分に気づく得も言われぬ読書経験は、小説を好んで読んでいる者には、きっと馴染みのものであろうし、多くの者にとって小説読書の尊い原体験でもあるだろう。

このような小説読書経験はそれ自体尊いだけでなく、こと現代においては、貴重な経験でもある。現代ではそもそも小説を読む人の数は着実に減っており、しみじみと小説世界に浸る読書経験をする機会自体が少なくなりつつある。実際アメリカで 130 万人以上の成人男女に対して行われた大規模な調査が明らかにしたのは、2017 年に何らかの小説（短編小説も含む）を一冊でも読んだと答えた人は全体のうち 41.8%しかおらず、この減少傾向は 2002 年の調査以来着実に続いているという事態だった¹。

現代社会での小説読者の減少理由には様々な要因が複合的に絡み合っていることは疑いえないが、文学者寄りの（悲嘆的）視点から「人々は小説（的なもの）への興味を次第に失いかけているのだ」と説明するより、高度情報化社会における人々の生活の劇的变化にその説明を求める方がより実態に沿っているかもしれない。文化庁による平成 25 年度の世論調査によると、「読書量は減っている」と回答した人にその理由を尋ねた結果、「仕事や勉強が忙しくて読

む時間がない」(51.3%)、「情報機器(携帯電話、スマートフォン、タブレット端末、パソコン、ゲーム機など)で時間が取られる」(26.3%)、「テレビの方が魅力的である」(21.8%)という回答が大部分を占めた²。調査結果からの飛躍を恐れず言えば、現代社会では人々の暮らしはどんどん忙しくなり、腰を据えてじっくり小説読書をするようなまとまった時間をとる余裕も次第になくなりつつあり、また一方で、我々の知的・文化的営為のかたちもその対象も細分化・多様化しており、そのような状況で小説というメディアをあえて選ぶには、何らかの意識的な動機づけが改めて必要なかもしれない。知的・文化的好奇心があれば人はおのずとまずは小説を手にとっていた時代では、もうない。

文化メディアが多様化した現代社会において、もはや小説読書は娯楽や教養のための知的・文化的営為の王道ではなくなり、小説を読めばおのずと歴史や文化を含めた人間の理解が深まりますよ、と小説メディアの文化的地位を当然視したお題目をつぶやいていればそれなりの体面を保てた結構はもはや過去のことなのかもしれない。しかし、それはそれで時代の流れでもあり、知的・文化的営為の多様化や複雑化自体は喜ばしい事態である。小説以外の多様な文化メディアの台頭を僻む必要はない。単に選択肢が増えただけのことである。そうであれば、「なぜ人は小説を読まなくなったのか？」と嘆いたり「なぜ人は小説を読むべきなのか」と居丈高な姿勢で問うたりするよりは、むしろ、「なぜ我々は(それでもあえて)小説を読むのか」という愚直でナイーブな問いを今一度真正面から考える方が生産的であろう。

「なぜ小説を読むのか」という愚直な問いには、「楽しいから」とまずは気取らず素直に答えるのが道理だろう。では小説読書の楽しみとはいったいどういうものか。小説を読む楽しさには様々な種類やかたち、方法があるのは間違いないが、本稿冒頭で素描したような読書時の共感経験や感情移入、追体験——英語で言えばエンパシー(empathy)体験³——がその楽しみの大きな核の一つであることは疑いえない。では我々が小説読書でエンパシー体験をする際にいったい何が起きているのかについては、しかしながら、まだほとんど何もわかっていないのが現状である。ここで問いは「なぜ読むのか」からそれを説明す

るための「どう読んでいるのか」という問いに変わる。

以上のような問題意識をもって、本稿ではまず文学研究領域におけるエンパシー研究を概観する。その後、学際的な研究も視野に入れつつも哲学の分野からエンパシーという捉えがたい現象に明確な定義付けを試みている哲学者エイミー・コプラン (Amy Coplan) のエンパシー理論を紹介する。同時に、彼女の理論を「小説のエンパシー」の観点から吟味・検討することで、文学研究におけるエンパシー理論の在り方について考察を加えたい。

1. 文学研究におけるエンパシー研究

20 世紀末ごろから主に神経科学、発達心理学、社会心理学、そして美学哲学や道徳哲学を中心に盛んになった学際的なエンパシー研究の流れには少し遅れて、文学研究におけるエンパシー研究は、ナラトロジー学者スザンヌ・キーン (Suzanne Keen) によって 2007 年に出版された『エンパシーと小説』 (*Empathy and the Novel*) を嚆矢として本格的に着手された。その後 2014 年には、メーガン・メアリー・ハモンド (Meghan Marie Hammond) が『エンパシーと文学モダニズムの心理学』 (*Empathy and the Psychology of Literary Modernism*) を単著として出版しつつ、スー・J・キム (Sue J. Kim) とともに『文学を通してエンパシーを再考する』 (*Rethinking Empathy through Literature*) を編み、学際的なエンパシーは研究対象としてようやく認知され始めてきた。

しかしながら、キーンの野心的な研究書は小説のエンパシーそのものについては実はあまり教えてくれない⁴。主にナラトロジー的な関心から神経科学や発達心理学並びに社会心理学などで科学的・実証的に研究されているエンパシー研究の成果を概観しつつ、エンパシー体験についての実際の読者の反応や作家の言葉なども考察の対象としながら、キーンは学問的に検証可能であろう語りのエンパシーについての諸仮説を立てる⁵。彼女の仕事の射程は広くその意義は非常に大きい。彼女の本の主目的が、エンパシーに関心のある他分野の

学者たちが安易に唱えがちな「エンパシー＝利他主義仮説」(empathy-altruism hypothesis) と小説読書との結びつき——小説を読めばエンパシー能力が養われ、ひいては他者の立場に立って行動できる利他的な人格形成につながるという言説——をできるだけ実証的に批判することに向けられているため、彼女の考察の対象はおのずからエンパシー的読書の誘因や効果、またはそれに関わる実証実験や調査に傾注し、小説読書のエンパシー体験の内実自体についてはそれほど詳しく論じられていない⁶。

一方ハモンドの研究書は、イギリスのモダニズム文学における語りの実験が当時の様々なエンパシー理論と共鳴している様を新歴史主義的に検討している。19世紀末ごろから20世紀初頭にかけて学問として成り立ちつつあった心理学領域で熱心に議論されていた「他者意識の問題」(problem of other minds)に答えるかたちで、当時のドイツでは *Einfühlung* (感情移入⁸) という美学概念が様々な論者によって(様々な混乱を含みながら)議論されていた。そのドイツ美学用語の英語訳として、20世紀初めに *empathy* という語が造られた⁷。ハモンドは当時のエンパシー理論への希求をモダニズム文学的な欲望として捉え⁹、18-19世紀的シンパシーから20世紀的エンパシーへという他者理解の方法のパラダイム変遷に、リアリズム小説からモダニズム小説への軌跡を重ね合わせ、その共鳴関係を考察している。しかしながら、ハモンドの新歴史主義的考察は、当時の美学用語としての雑多だが狭い意味内容に焦点を当てているため、現在我々がエンパシーとして理解しているものと多少なりともズレており、ましてや読書体験としてのエンパシーへのつながりもあまり考察されていない。

ハモンドとキムの論文集は、対象となる国や時代だけでなくアプローチも異なる様々な現役文学研究者たちがそれぞれに文学的エンパシーを論じており、文学におけるエンパシー研究の可能性の広がりを感じさせる。その一方で、論者たちの間でエンパシーそのものに対する理解の統一はなく、編者であるハモンドとキムもわざわざ“a singular definition of empathy would be too narrow to accommodate the wide range of exciting work on fellow-feeling that

literary scholars are doing today” (1)と論文集の序論で明記し、あえて文学や小説のエンパシーの内実については定義をしないようにしているばかりか、依って立つような理論の方向性も示さず、その学際的の広がりを紹介するにとどめている。

以上のように、文学研究におけるエンパシー研究は未だ着手されたばかりで、学際的になされているエンパシー研究の成果についても未消化で、文学理論として成熟しているとは言い難い。その中心である小説のエンパシーについては言わずもがなである。確かに、エンパシー自体が目に見えない捉えがたい現象である上に、近年のエンパシー研究の隆盛が神経科学分野を中心に始まったという経緯もあり、いわゆる理系文系問わず、現在では人文科学、社会科学、自然科学と非常に多岐にわたる分野で実証的にも思弁的にも論じられており、その学際的な趣の強い研究の広がりを文学研究者がフォローするだけでも大変である。まだ研究対象として議論され始めたばかりの小説のエンパシーの定義や概念について、広く受け入れられつつ包括的かつ決定的なものを提出するのは難しい。しかし同時に、エンパシーとは日々の生活で起こる非常に身近な現象でもあって、小説のエンパシーも小説読書においてさほど珍しい経験ではないし、むしろ小説読書の原体験をかたちづくるものとして核心的ですらある。その上、冒頭で論じたように、総体としての小説読者の数も確実に減少しており、以前とは違った意味で、「小説とは何か」が問われている。それはもはや文学研究内での批判的・内省的な問いではなくなって、より対外的で横断的な説明責任になったのかもしれない。先述したように、文学におけるエンパシー研究の嚆矢であったキーンの研究書の狙いは、他分野の学者たちによる「エンパシー＝利他主義仮説」と小説読書の安易な結びつけへの批判だった。この事態が暗に示しているのは、今や他分野の文学読者が好き勝手に小説のエンパシーを論じ始めたということよりも、その裏にある、文学研究におけるエンパシー研究の蓄積が今まで疎かになっていたという事情の方である。このような文脈において、学際的にならざるを得ないエンパシー研究を文学分野で目指すには、他分野の成果の我田引水の意味での学際性ではなく、他分野での研究蓄積や

議論の文脈を尊重し、領域横断的研究の複雑さを自覚したより慎ましい学際性が必要なのではなからうか。善かれ悪しかれ切れ味がある分いささか性急な言い回しも多かった 20 世紀的な「批評理論」に比するような強い理論はエンパシー研究の分野にはない。ひとつひとつ、わかっている部分から少しずつ積み上げていくしかないのである。その一歩として、以下では、現在のエンパシー研究で、学際的な広がりにも目を配りつつ最も包括的かつ明瞭にエンパシー理論を組み上げている哲学者エイミー・コプランの理論を小説研究の視点から検討したい。しかしながら、私見の及ぶ限りでは、(文学研究においてもその他の分野においても) 日本語で彼女の理論を論じたものは未だ見当たらないので、まずは彼女の理論を紹介するところから始めなければいけない。

2. エイミー・コプランのエンパシー理論

様々な分野の様々な研究者たちによるエンパシー概念の定義の乱立という現状に対して、多くの研究者たちはエンパシーの概念を拡大的なものによって場当たりの対処しようとしている一方で、エンパシーのような学際的研究に対して哲学者ができる貢献は理論や概念の枠組みを明確なカタチで提供することにあると使命感を感じるエイミー・コプランは、拡大的なエンパシー概念の定義付けはさらなる混乱を招き、結果として我々のエンパシーに対する理解を妨げると論じ、学際研究成果に目を配りながらも狭義のエンパシー概念の形成を試みる。(Coplan “Real Empathy” 41-44)

コプランのエンパシーの定義自体は、いたってシンプルである。コプランによれば、エンパシーは “an observer simulates another’s situated psychological states, while maintaining clear self-other differentiation” (同上 58) となるような、情動面と認知面両方に関わるそれ自体高度な認知プロセスである。ただし、彼女はこのようなエンパシー概念(あるいはそのシミュレーション的想像力の発揮の仕方)に厳しい条件を設定する。その条件とは「情動の一致」(affective matching)、「他者本位の視点取得」(other-oriented

perspective taking)、そして「明確な自他区別」(clear self-other differentiation)であり、この3条件がエンパシーを構成する本質的な特徴だとしている(同上44)¹⁰。

コプランが唱えるエンパシーの3大条件(あるいは、感情に関わるだけでなく高度な認知プロセスであるという前提条件を含めれば、4大条件¹¹)は、エンパシーとその類似現象を差異化・区別するために求められている。

まずコプランがエンパシーの前提条件としている高度な認知プロセスという点は、エンパシーを、情動の一致という点でよく似た現象である「感情伝染」(emotional contagion)と区別する¹²。感情伝染とは、他者の感情状態を無意識的に模倣し自分の感情をいつの間にか自身が知らないうちに対象の感情に同期させてしまうことを言う¹³。神経科学者や心理学者の多くは感情伝染をエンパシーの基礎にあたるものとして認めエンパシーと地続きのプロセスとして捉えているが、コプランはこれに反対し、あくまでエンパシーと異なる現象として区別することを主張する。彼女によれば、感情伝染は高度な認識プロセスを必要とせず自動的にあるいは不随意に起こるものである。つまり、主体のもともとの心的文脈を無視したかたちで感情の伝播が起きてしまう。一方で、伝染源である他者の心的文脈を理解してなくても起こってしまう。以上の点で感情伝染は、他者の感情を複雑な認知プロセスを解せず直接的に伝えてくれるので確かに情動の一致が起こるが、その内実は他者理解とは言い難く、複雑な認知プロセスを必要とする他者理解の方法としてのエンパシーとは区別されるべきだ、とコプランは説く。(同上45-53)

次に、「情動の一致」は、エンパシーを類似概念である「シンパシー」(sympathy)から区別するために要請される。この点は心理学者をはじめ多くのエンパシー研究者が同様に指摘してきた経緯があり現在では広く受け入れられている点でもあるためか、コプラン自身は近年の論文であまり強調していないが、彼女によれば、シンパシーには「自他区別」が要請され認知と感情の両方のプロセスが関わっているという点ではエンパシーと似ているが、シンパシーは他者への感情の働きかけであって、エンパシーでは起こるはずの情動の

一致が起こらない。確かに、シンパシーとエンパシーは同時に生起することも多く、日常的な語用においては混同されたり交換可能なかたちで使われたりすることもしばしばだが、コプランによれば、シンパシーのプロセスは本来的に利他的な (altruistic) 契機や他者への気遣い (concern) である点で、自らの感情状態を他者の感情状態にシミュレーション的に一致させることで理解を目指すエンパシーのプロセスとは異なる現象である。(Coplan “Empathic Engagement” 145-146)

さらに、コプランの唱える「正真正銘の」(genuine) エンパシーにおいては、想像的に他者の視点に立つときそれが「他者本位の視点取得」でなくてはならない。一方で、それが「自己本位の視点取得」となっているときは、あくまで「疑似エンパシー」(pseudo-empathy) でしかない、と言う。「自己本位の視点取得」というのは、対象となる他者の視点に立ってその状況を想像したときに、「自分は」どうするかということを想像してしまう視点の取り方で、同様の想像をしたときにその対象他者自身がどうするかということをその人物に即して想像する正真正銘のエンパシーの「他者本位の視点取得」と区別される。自己本位の視点取得による疑似エンパシーは、情動の一致を目指す心的シミュレーションにおいて自他の心的状態の齟齬が往々にして大きく、概して理解は一般論的なレベルにとどまり、「エンパシーの精度」(empathic accuracy) を欠く。つまりは、自己本位の視点取得に基づいた疑似エンパシーの想像力は、他者を自己の拡張としてしか捉えられないという点で、正真正銘のエンパシーと厳密に区別されるべきだ、とコプランは説く。(Coplan “Real Empathy” 53-57)

また、自己本位の視点取得には、心理学で言う「個人的苦痛」(personal distress)¹⁴ を招きやすいという問題もある。「個人的苦痛」とは、(往々にしてネガティブな感情対して起きることが多い) エンパシーやそれに類する現象において、他者のネガティブな感情経験(苦痛や苦悩、悲しみなど)を自分自身の感情として経験してしまう現象である。このとき、対象となっている他者の感情状態は大まかに理解し情動の一致も起こるが、視点取得の焦点があくまで自己にあり、対象他者との情動の一致以後は自分自身の苦痛をどうやって軽減

したり避けたりするかという問題の方に傾注していまい、対象他者の内的状態の理解を目的とするエンパシーのプロセスから逸脱してしまう。(同上 56-57)

最後に、コプランはエンパシーの成立条件に「自他の区別」を導入する。なるほど「他者本位の視点取得」という条件には自他の区別がすでに前提としてある程度織り込まれている。自他の区別ができなければそもそも自己本位の視点取得を避け他者本位の視点取得を目指すことなどできないだろう。しかしながら、コプランによれば、他者本位の視点取得だけでは正真正銘のエンパシーにおける自他の区別の要請は完全には満たせない、と言う。コプランが想定しているのは、視点取得の他者本位性が過ぎて自己消失につながる場合である。他者本位の視点取得をしたとしても、明確な自他の区別が意識されないために、エンパシーをする主体が自己意識 (sense of self) を見失ったり他者意識に合一 (fusion) してしまったりして、対象である他者と適切な距離が取れない状態をコプランは正真正銘のエンパシーとは認めない。(Coplan “Understanding Empathy” 15-17) また別の論文では、自他の区別は、他者 (の経験) との適切な距離を保つ効果の他に、対象である他者にエンパシー的シミュレーション体験をしながらそれとは別に主体自身の経験も同時に持つことを可能にする、としている。つまり、自他の区別によって、エンパシーする主体の意識は二重の経験をすることができる。しばしば、エンパシー体験をしている主体には他の種類の経験ができないかのように考えられることがあるが、実際には、エンパシーしながら、対象である他者の感情状態に反応したりすることは可能なはずである。これは、自他の区別があることによる、とコプランは主張する。(Coplan “Empathic Engagement” 144) 自他の区別のもうひとつの効果は、自己と対象他者の境界を認め、自分自身の経験並びに対象の経験の個性 (singularity) を尊重するのを可能にするという点である。(同上)

以上のように、コプランのエンパシー理論は、感情が関わる高度な認知プロセスであるという前提条件のもと、「情動の一致」、「他者本位の視点取得」、そして「自他の区別」という3つの必須条件を要請する。確かに、コプラン自身も正直に認めている通り、これでは“Genuine empathy is difficult to achieve”

（“Real Empathy”58）と言わざるを得ず、このような厳しい条件を成立させた正真正銘のエンパシーは現実的に達成しうるのかという疑問もある。しかしながら、とコプランが言うには、このように達成困難だからこそ、つまりエンパシーの主体による努力や加減が試されるからこそ、エンパシーは、より自動的・無意識的に発生する他のボトムアップな類似プロセスとは違い、意志的に行われコントロールされるトップダウンなプロセスなのであり（同上）、他者を理解するための複雑なプロセスを含みうる「経験的な理解」（experiential understanding）になる、と主張する（Coplan “Understanding Empathy” 17-18）。

ここまで、私見の及ぶ範囲では現在の学際的エンパシー研究において最も包括かつ明瞭でありながら理論的に十分な強度と複雑さを兼ね備え、また学問的にも検証可能な理論¹⁵を提出しているコプランのエンパシー理論を素描してきた。研究対象の不可視性に加えて語彙の不一致や定義の不明瞭さ、分野の横断などのせいで大規模に議論が錯綜しているエンパシー研究において、コプランのなした仕事の意義は大きい。ただし当然ながら、彼女がここで提出したエンパシーは、あくまで対人的に起こる心理現象についてのものであり、本稿での主眼である小説のエンパシーに直接応用するにはあまりにも無理がある。しかしながら、文学研究の分野ではエンパシーについては理論として呼びうるほどの体系的な蓄積も洗練も見当たらない。故に、以下で小説のエンパシーについて考察するが、コプランのエンパシー理論を尊重しつつもいわばたたき台にして、それに注釈をつけるようなかたちで小説というものにおけるエンパシーの輪郭やそれに対するアプローチを素描し検討してみたい。

3. コプランの理論が小説読書に応用できる点

当然のことだが、コプランのエンパシー概念は、原則的に対人的なエンパシーを念頭に置いて定義づけされている。しかし、彼女は同様の定義を用いながら、小説におけるエンパシーの仕方を論じたり¹⁶、映画における感情伝染を検

討したり¹⁷したこともあるので、フィクション作品（の登場人物）に出会うときに起こるエンパシー的想像力の現場にも、自身のエンパシー概念定義がある程度は適用可能であると彼女が考えていることが推測できる。であるならば、彼女の概念を小説読書のエンパシーの文脈で文学研究者の視点から改めて検討・吟味してみることは、異なる研究文脈にある他分野の研究成果への無理解に起因する難癖などではなく、生産的な意義のある分野横断的試みとなるであろう。

はじめに、小説のエンパシー理論にとってコプランの概念定義が資する点をいくつか指摘したい。まず一考するまでもなく明らかなのは、彼女の概念形成の明瞭さであろう。正真正銘のエンパシーが成立する諸条件を明確なかたちで提示し、類似する情動的現象や概念から決定的に差異化したことは、行動主義的な観点からは不可視の心理現象であるエンパシーの輪郭をくっきりとあぶりだし、概念的に扱いやすくなっている。従来の文学研究では、エンパシーと、シンパシー、感情伝染、疑似エンパシーや個人的苦痛のような類似現象を差異化する用語もなく一緒に論じていた上に、用語の適用も曖昧で上手く立論・分析されてこなかったのが、コプランのような概念形成は、今後エンパシー的な現象を文学研究の場で扱う上で、まずは参照してしかるべき導きの糸となるだろう。

この点で特筆すべきは、（これはコプランだけの達成ではないが）エンパシーをシンパシーと明確に区別した点である。とかく他者への配慮が転じて善意の押し売り（とそれに付随する他者への無理解、並びに現状維持的な感情構造）にもつながりやすいシンパシーを概念的にエンパシーから切断することで、情動や視点の一致というシミュレーション的想像力のあり方を強調できるという強みがコプランのエンパシー概念にはある。文学研究において、従来シンパシー（の問題点）と一緒にされて画一的に批判のみされてきたエンパシー的想像力だが、コプランの仕事によって、銜いなく正面からその肯定的意義を追求しやすくなった、と言える。

また、エンパシーの他者理解の文脈で言えば、コプランが概念形成をする際

に、「自己の区別」や「他者本位の視点取得」の条件に見られるように、それが他者（の内的経験）の個性（singularity）を尊重する経験となるように議論を組み立てている点も、文学研究の視点から、評価できる。エンパシーは、文学の世界では、当該語が生まれ隆盛を極めたモダニズム芸術運動の時期においてさえ、その感情的・認知的作用が他者（の経験）の個性を同一化の果てに矮小化したりステレオタイプ化したりする独我論的な傾向があるとして、同時代の論者たちや作家たちからさえも非難されてきた¹⁸。近年の文学研究においても、特にマイノリティ文学やポストコロニアル文学の研究において、エンパシーの際の、自己を他者に投影する、あるいはそうすることで他者（の経験）を理解した気になる想像力の政治的な危険性は厳しく指摘されてきた。すなわち、エンパシー的想像力は、そのような他者理解（の不正確さ）の文脈で、ほぼ一方的に批判されて来た経緯がある。そういった批判にも耐えうるであろうコプランの概念であれば、従来その負の面ばかり喧伝されてきたエンパシー的想像力の発揮について、その創造的側面や読解効果にまつわる美点を検討する道も開けるだろう。

もう一つ他者理解の文脈から言えば、コプランが正真正銘のエンパシーに課した他者本位の視点取得という条件は、対人的なエンパシーに当てはまるだけでなく、小説読書のエンパシー体験のあるべきかたちをうまく言い表している。「他者本位」の視点取得というのは、小説のエンパシー的想像力の文脈に適用すれば、語り手の語りをまずは全面的に受け入れ物語内容や人物造形に沿ってできるだけ忠実にテキストを読むことを要請する条件、つまり「語り手本位」あるいは「テキスト本位」の視点取得と読み替えられる。例えば、「永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言い張っていた。」（三島 5）と始まるある一人称小説の冒頭をエンパシーしながら読む際、その読者が「自分が生まれた時の光景は覚えていないな」とか「自分の記憶にある最も古い光景は云々だな」とか「自分が生まれた時の光景を見たことがあるなんてありえない。嘘だ」などと、語り手の視点に身を委ねず自分の経験にばかり引き付けて——すなわち「自分本位」にばかり——読むとすれば、小説読書のエンパシ

一は駆動するどころか、小説読書自体も遅々として先に進まないだろう。その意味でコプランが課す「他者本位の視点取得」という条件は、小説読書のエンパシーに適用すれば、まずはより良くテキストを読む、語り手の視点に寄り添うという、小説読書の基本的な心構えを指し示す条件であると解釈できる。

他者理解の文脈から転じてエンパシーをする主体の文脈においても、コプランの概念形成は小説読書のエンパシーに関わる重要な点を指摘している。それは先述の、「自他の区別」の効果のひとつであるエンパシーする主体の意識の二重性である。エンパシーする主体が明確な自他の区別を保持することで、結果として、エンパシーの主体は対象にエンパシーしながらも、主体自身の経験を持つことが可能になる。つまり、エンパシーして他者の感情経験をシミュレーション的に自分の内に感じながらも、その感情経験の本来の所有者は他者のうちにあることを意識することで、エンパシーの主体はシミュレーション的感情経験に完全に溺れることなく、その体験を対象として客観視したり評価したりする余裕が保てる、ということだ。このようなエンパシーする主体意識の二重性は、小説のエンパシー的読書体験時の内実をうまく言い当てている。エンパシーする主体の意識にこのような二重性があるからこそ、先ほど三島の小説冒頭部で例に挙げたような自分本位な脱線が（推奨されないとはいえ）そもそも可能なのだし、あるいは、テキストを読むという知的な作業を並行して行えるのだし、また他者の感情の文脈（一致する対象となる感情を引き起こす原因や状況）を理解するという知的作業をそのシミュレーション的感情体験と同時進行できるわけだし、ひいては、エンパシー的に小説世界に没頭したり登場人物に感じ入ったりしながらも、それと同時に、そのような没入体験に対して客観的な判断や批判的な姿勢を持つことができるのだと考えられる。加えて、自他の区別に起因する主体意識の二重性は、小説のエンパシー的読書に快楽が入り込む余地をも説明してくれる。小説読書のエンパシーも、対人エンパシーと同様に、ネガティブな感情（悲しみ、苦しみ、悩みなど）に対して發揮されやすいのは自明のことだが、そのネガティブな感情をシミュレーション的に経験しながらも、その読書経験自体をポジティブな体験として感じることもできるの

は、自他の区別から来るこのエンパシーする主体の二重意識のおかげであろう。小説読書において自他の区別は、単に認識論的になされるだけでなく、現実の読者と虚構の世界・登場人物の区別として存在論的にも保障されているので、二重の意識を維持しやすく、対人のエンパシー体験では往々にして倫理的に許され難いエンパシー体験そのものへのポジティブな反応が、小説のエンパシーでは許されてしまう事態が、コプランの概念で説明できる。

以上のこととも関連して、最後に指摘しておくべきことは、彼女がエンパシーを単なる情動的な反応ではなく高度な認知プロセスと捉え、エンパシーする主体の意識を強調した点である。これによってエンパシーの感情体験に関わる自意識的な面を正当に理解できると思われる。この点は、例えば、近年文学研究の分野で注目を浴びつつあるいわゆる「情動理論」(Affect Theory) との間の分水嶺となる。身体を中心とした情動理論や情動研究をテーマに文学論文集を編んだ竹内勝徳が説明しているように、情動理論では、意識下にあらわれ意識の対象として捉えやすく、慣習的な分類分けやラベリングがある程度可能な「感情」(emotion) は、「身体感覚と外界の同調性や、意識の管轄を超えた、主体と外界を結ぶ回路」(竹内 4) としての「情動」(affect) と峻別され、この主に人文学分野で行われている情動研究は「言語や意識では操作しがたい身体レベルでの関係性や情動のあり方」(同上 7) に焦点を当てて行われている。もちろん、エンパシーにおいて経験するシミュレーション的感情は、その意味の情動も感情も両方含んだ経験であるので、情動研究における成果を軽視する必要は全くない。しかしながら、コプランが言うように、エンパシーには主体の自意識が必要不可欠でもあるし、こと小説読書を考えてみれば、なんだかわからない情動にほだされてしまう体験とともに、意識が受け取った感情をしみじみと内省的に噛みしめる体験も、どちらも小説読書のエンパシー的楽しみに含まれると思われるので、あるいは、そういった情動の捉えがたいあらわれを、善かれ悪しかれ、意識において改めて捉えなおして本を閉じるというのが二重意識を要請するエンパシー的小説読書の定めだと思われるので、文学における情動研究の成果をそのまま当てはめるだけでは、小説のエンパシー研究にとって

片手落ちとなるだろう。

コプランによる明確な概念形成とその類似概念との差異化、他者（の経験）の個性の尊重、テキスト本位の視点取得、エンパシーする主体の意識の二重性と主体の意識下での感情体験といった論点が、コプランのエンパシー理論を小説読書に応用した際に評価できるポイントである。しかしながら、当然コプランの理論には、小説読書に応用するにあたってうまく当てはまらなかったり修正したりしなければいけない点が存在する。しかも以上に挙げた彼女の理論の美点のいくつかは、そのままその弱点にもなりうる。以下、そのような問題点をいくつか挙げてみることにする。

4. 小説のエンパシーに応用した場合のコプランの理論の問題点

結論を先に言ってしまうえば、コプランのエンパシー理論を小説読書に応用するにあたって問題になるのは、大まかに言えば、その概念があまりに認知主義的な上にその成立の条件が厳しすぎる点、そして感情、特に虚構作品における感情の扱い方が考え抜かれていない点である。

まず指摘したいのは、その概念があまりにも認知主義的で、認知的にクリアしなければいけない条件が厳しすぎる点であろう。確かに、コプランの主張する通り、単なる情動的な身体反応を超えて文化的社会的文脈まで勘案しなければいけないエンパシーとは、高度な認知プロセスであるべきである。しかしながら、その概念成立の条件の厳しさは、我々がふつう小説のエンパシーとして思い描くものに付随する気軽さの実感とかけ離れている。小説の読者は、狙ってそうするというより、あくまで「ふと」エンパシーを感じてしまうわけだし、エンパシーを感じている最中あるいは読後に「情動の一致」の正確さや「他者本位の視点取得」の有無、「自他の区別」の峻別さについていちいち検討するわけではない。しかも、エンパシー研究が盛んになる以前に小説における感情のシミュレーションのプロセスについて論じた哲学者スーザン・L・フィーギン (Suzan L. Feagin) が指摘するように、過度な自意識は心的プロセスのシミ

ュレーションを妨げてしまう要因の一つであり (Feagin 107)、エンパシー成立の条件が逆にエンパシー成立を阻害することにもなりかねない。

コプランのエンパシー概念の成立条件がこれほど厳しいのは、おそらく、それがあくまで対人エンパシーの理論であり、エンパシーを何よりも他者理解の手段として捉えているからであろう。しかし、他者理解の手段としてのエンパシーというのは、小説のエンパシーに当てはめるには、一義的に過ぎる。確かに、エンパシーを他者理解の手段として捉えるならば、その内実に、正確でありかつ他者の他者性を尊重したプロセスを理論構築するのがまっとうな倫理的態度であるのは疑いえない。一方で、小説のエンパシーにおいては、常に他者理解が目的の中心にあるわけではなく、それが手段にもなりうる、というのが実感に正直なところだろう。もちろん小説の読者もエンパシーに他者理解を求めるが、それと同時に他の動機も持ち込むのが普通である。それはある者にとっては現実世界からの気晴らしや逃避かもしれないし、あるいはエンパシー体験に付随する快楽を求めてかもしれない。またある者にとっては自分探しのための手段であったり、(歴史的文化的なものを含めての)知識欲を満たすため、あるいはまだ見ぬ景色や視点への好奇心を満たすための手段であったりもするだろう。つまり、小説のエンパシーは必ずしも他者理解だけが目的ではなく、様々な動機が付随したり持ち込まれたりして起こるものであり、他者理解のみを目指したコプランの概念形成をそのまま応用するのは、小説のエンパシーの内実を貧しくするだけである。

また、「他者本位の視点取得」というエンパシーの成立条件も、エンパシーする読者を「テキスト本位」に視点取得させるという心構えとして読み替えられることを先に指摘したが、これもあくまで良心的な「心構え」でしかなく、小説のエンパシーの必須の条件とするわけにはいかないだろう。もちろん、研究的には「他者本位」すなわち「テキスト本位」の視点取得に基づいたエンパシー体験に焦点を当てざるを得ない。しかしながら、先に述べたことを繰り返すが、読者には小説をある程度「自己本位」的に読む権利は常にあるのだし、さらに言えば、自分の人生を変えてしまうような、真の意味で感動的な、心を深

く揺さぶられる小説のエンパシー体験は、多分に誤読を含みつつしかしそれ故個人的な事情や生に深く切り結ばれたシミュレーション的想像力、つまり多少なりとも自己本位的な読書から生まれることを我々は経験的に知っている。このような自己本位なエンパシー体験はその経験の個別性や一回性にこそその特徴のある体験であり、それ故一般化しづらく客観的な俎上において議論することは難しいが、だからと言って小説のエンパシーの議論から完全に切り捨ててしまえば、小説のエンパシー体験の最も生産的で最も意義深いありようを取り逃がすことになるだろう。その意味で、小説のエンパシーにおいては、コプランが課す他者本位の視点取得並びにその小説用の翻案であるテキスト本位の視点取得は、あくまで心構え程度の条件としつつ、自分本位の誤読的なエンパシーを許容する理論的余裕を保つべきだろう。

加えて、コプランの概念に必要な「自他の区別」という条件も、小説のエンパシーにそのまま課すには厳しすぎる。小説読書においては（必ずしも歴史的にいつもそうであったわけではないが、少なくとも現代の教育を受けた読者にとっては）ふつつ現実と虚構という区別が存在論的に自他の区別をはじめから保障しているので、ことさら認識論的に自他の区別を強調する必要がないし、そのような存在論的な区別の保障があるからこそ、エンパシー的想像においては自他の区別を積極的になし崩しにして小説世界や登場人物に（現実の対人エンパシーでは倫理的に許されない程度にまで）没入することを求める読者もいるだろう。また、特に就学前の子供のごっこ遊びやフィクション受容などによくある現象だが、虚構作品に関わるエンパシー的想像力において、自他の区別並びに現実と虚構の区別すら曖昧にし、現実の自己と虚構の登場人物を混交させたり虚構世界の規則を現実世界の方に押し広げたりすることは、一概に否定的な面ばかりとは言えない。つまり、自他の区別もまた、それを厳しく課すだけでは、小説のエンパシー体験の内実をいたずらに狭めることになりかねない。

ここまでをまとめると、コプランが課すエンパシーの条件は——それらの条件がエンパシー体験のキー・ポイントであることは間違いないが——小説のエンパシーを考えるにあたっては、やや緩くとらえるほうが我々の実感に即して

いるし、研究の議論においては、生産的ですからある、と判断せざるを得ない。

また、コブランの厳しい条件付けのもうひとつの問題点は、彼女の定義する概念がかなり静的であり、エンパシーのプロセス的なありようを説明できない点である。コブランの概念が説明できないプロセスは、エンパシーへの欲望（あるいはその契機）とエンパシーする主体（の変化）の2点である。まず、情動の一致を成し遂げつつ自他の区別を保ち他者本位の視点取得をする高度な認知プロセスというコブランのエンパシー概念は、条件が厳しすぎるせいで、そもそもなぜ我々がわざわざそこまでしてエンパシーしようとするのかという欲望や動機の点を説明できない。そのような厳しい条件付けで縛らねばならないほどの強度のある欲望とは何なのか、なぜそのような欲望を抱くのか、という点についてコブランは言及していない。また、コブランの概念は自他の区別や他者本位の視点取得といった他者（の経験）の尊重に関わる条件については明らかにしてくれるが、エンパシーをする主体については、二重意識を持つ点以外、あまり教えてくれない。特に小説読書においては、往々にしてエンパシーすることで読者という主体が何らかの変化を経験すること目指されるが、コブランの概念はそのようなエンパシーする主体に起こる変化などの効果については説明していないし、エンパシーがその主体に及ぼす何らかの効果を、彼女が課している諸条件から導き出すこともできない。

以上、コブランのエンパシー概念を小説読書に応用する際の問題点をあぶりだしてきたが、それらの問題点のほぼすべてに通底する最も大きな問題点を最後に指摘せねばなるまい。それは——おそらく本人も気づいているだろうが——彼女の条件のひとつにも組み入れられている「情動の一致」という条件の検討（の物足りなさ）、あるいは情動・感情そのものへの考察（の物足りなさ）である。情動の一致という条件については、例えば、どのくらいの正確さで一致していればよいのか、どの種類の感情についても同じようにエンパシーの条件として組み入れられるのか、あるいは、情動の一致にはその情動の強度（の一致）は関係してくるのか、といった点については、ほとんど彼女は論じていない。ただ、情動や感情（の一致）については、神経科学や心理学、認知科学などで

進められている感情についての実証的研究の成果がまだ十分に出そろっていない、という事情も多分にあるだろう。そのような科学的分野のフォローも丁寧に行って理論化を目指すコプランならばなおさら情動の一致の内実の理論化について慎重になるのも理解できる。おそらく今後のコプランの仕事は、そういった学際的領域の成果を換骨奪胎したのち、情動と意識の関わり方について概念を洗練する方向に進むのかもしれない。それ故この点は彼女の理論の問題点というより、エンパシー研究全体における今後の課題といえるかもしれない。

感情に関わるコプランの概念形成についての疑問点を現時点でひとつだけ指摘できるとすれば、(情動理論における意味での)「情動」の切り離しであろう。先に論じたように、彼女はエンパシーをあくまで高次な認知プロセスとして定義し、ボトムアップ的に作用する身体的なあるいは無意識的な「情動」を完全に切り捨て、自他の区別ができるような意識のフィルターを通した「感情」のみをエンパシーで扱う対象とした。さらに、より意識的な認知プロセスが関わる文学読書においては、「情動」に相当する感情伝染はおこらないと考えている節がある (Coplan “Catching” 35)。確かにこの「情動」の切り離しは、感情伝染との差異を指し示しつつ、他者理解としてのエンパシーの意識プロセスを説明することに貢献している。しかしながら、本当に言語芸術においてエンパシーに無意識的・自動的な「情動」が作用しないのかという点については、より慎重になるべきだろう。イタリア語の動作動詞などを使ったある実験によると、我々が読む作業をする際にも、動作動詞があらわす意味内容に対応した脳の運動系が活動していることが確認されており、確かに我々がある動作を目で観察しているときと読んで理解しているときではその反応の速度に差はあるが、どちらにも単なる意識的な認知には収まらない神経的・身体的な面があるという²⁰。無論、言語と身体性のつながりは未だ神経学的には説明できないことの方が多いが、だからといってコプランのようにエンパシーから身体的な情動を切り捨ててしまえば、快樂を含めた小説読書経験の身体性を矮小化してしまうことにもなりかねない。

このように、コプランの概念は、小説読書にそのまま応用すると、課された条件があまりにも厳しく、小説読書におけるエンパシー体験の繊細さを取り逃がしてしまふ可能性があることを確認してきた。また、彼女の理論における情動・感情とエンパシーの主体意識との関わり合い方についても、さらなる理論的洗練が必要なことも確認した。もちろん、彼女の概念を小説読書に応用する際の問題点はこれだけに尽きるものではないだろうが、これ以上の指摘は、いわば、無い物ねだりにもなりかねない。

ひょっとしたら本稿ではコプランの理論を文学研究の立場から腐すことを目指していると誤解されかねないので最後に一言付け加えておくと、果敢に学際的な領域を横断しその成果を真摯に取り入れながら、できるだけ明確な定義を提供しようとするコプランの仕事は、称賛されこそすれ否定される類のものではありえない。真に批判されねばならない者がいるとしたら、それはコプランではなく、今まで真剣に自分たちの文脈でエンパシーに対して考察を加えてこなかった文学研究の研究者たちの方であるだろう。そうであるならば、領域横断的に様々な分野の研究成果に目を配りながら、各々の研究分野での蓄積や議論の文脈を尊重しつつ、自らの分野での使命を自覚したコプランの仕事は、難癖をつける対象などではなく、今後の文学のエンパシー研究者にとっては、研究の方向性を指し示してくれる模範的なふるまいとして、称賛されねばならない。

5. おわりに

以上、本稿では、近年の小説読者の減少に従って、「小説とは何か」という問いへの応答の仕方が変わったのではないかという問題意識のもと、その問いへのひとつの答え方として小説におけるエンパシーを理論化する道筋を提出した。続いて、文学研究分野におけるエンパシー研究を概観しながら未だ概念的な洗練が見いだせないことを確認したのち、学際的に研究され多義的なエンパシーを哲学の立場から明確に定義しようと試みたコプランの理論を紹介した。

それを受けて、コプランのエンパシー概念を小説読書の観点から改めて検討し、その応用可能性とともに問題点をあぶりだした。

コプランのエンパシー概念の検討の過程で出てきた論点は、今後、小説読書におけるエンパシーを考える上での勘所として有用だと考えられる。本稿では小説のエンパシー理論自体を提出するところまでいかず、コプランの理論に寄りかかるかたちで鍵となる論点をあぶりだすことでその輪郭を暗示するだけに留まったが、おそらく、小説のエンパシーの理論化は時期尚早なのかもしれない。小説のエンパシー体験は往々にして個人的であり、その内実を公に語る機会はあまりなく、語るとしてもみな自分自身の個別のエンパシー体験をもとに語ることが多い。理系的な物言いをまねて言えば、理論化するには未だデータが足りない、というのが実情だろう。であるならば、今後の研究の方向性としては、(もちろん学際的なエンパシー研究の成果をフォローしつつ) 個別の小説的エンパシー体験をひとつひとつ丁寧に拾い上げていくデータ集めも重要な仕事になるだろう。その場合、それがどんなに稚拙でナイーブに見えても、まずは——作家や物書き、友人や知り合い、ひいては自分の文学の授業の学生までも含めて——他者が経験する小説のエンパシー体験を尊重するという倫理的な心構えが、我々文学研究者にとって——あるいは文学を教える教師として——必要になるだろう。

注

1. National Endowment of the Arts による“U.S. Trends in Arts Attendance and Literary Reading: 2002-2017”、特に 9-12 頁を参照。小説に限らず何らかの読書(仕事や学校で必要とされるものは除く)をした者の数自体も、統計的に完全に有意とは言いきれないが、減少傾向にある。また日本では、数千人規模の調査だが、文化庁が「平成 25 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」の中で、日本の 16 歳以上の男女における読書量の減少傾向を報告している(10-11)。
2. 文化庁「平成 25 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」の 11 頁を参照。本文中では言及しなかった読書量の減少理由で大きなものには他に「視力など健康上の理由」(34.4%)がある。

3. 以下本稿では、類義語の乱用の回避と議論の明確化を目指して、「共感」「感情移入」「追体験」などと日本語で言われる意味内容を英語の *empathy* という語に託した上で、本文中では「エンパシー」とカタカナ表記して議論する。のちに触れるように、英語圏では *empathy* という語があらわす概念は学際的に活発に議論されている一方で、類似概念との差異化も含めてその定義に不明瞭な部分や多義的な部分も多い。そのうえ、*empathy* の日本語訳も複数存在し、無理に訳語を当てるといらぬ混乱を招くことが予想される。ゆえに、英語圏での議論の積み重ねを視野に入れつつ日本語で議論する折衷案として原則カタカナ表記を用いる。
4. もちろんキーンは小説を中心に論じているが、厳密に言えば彼女自身の用語は「語りのエンパシー」(narrative empathy) であり、詩や劇並びに映画なども射程に含めた概念把握をしている。
5. *Empathy and the Novel* に付された“Appendix” (169-171) には、語りのエンパシーの誘因や効果について 27 の仮説が列挙されている。
6. キーンによる語りのエンパシーの最新の定義は、“Narrative empathy is the sharing of feeling and perspective-taking induced by reading, viewing, hearing, or imagining narratives of another’s situation and condition. Narrative empathy plays a role in the aesthetics of production when authors experience it, in mental simulation during reading, in the aesthetics of reception when readers experience it, and in the narrative poetics of texts when formal strategies invite it. Narrative empathy overarches narratological categories, involving actants, narrative situation, matters of pace and duration, and storyworld features such as settings.” (“Narrative Empathy”) というものである。また、語りのエンパシーの理論を検討した彼女の論文“A Theory of Narrative Empathy”も参照。
7. 英語の *empathy* という語はドイツ語の *Einfühlung* に対応する訳語として、心理学者エドワード・ティッチェナー (Edward Titchener) が 1908 年に造った造語である。英語としての *empathy* の成立とその後の歴史については、Wispé を参照。
8. ドイツ語の *Einfühlung* には「感情移入」という日本語を当てるのが通例となっている。当時の「感情移入」理論で最も影響力のあった理論家の一人であるドイツの美学・心理学者テオドル・リップス (Theodor Lipps) の理論を日本に紹介した阿部次郎の著作『倫理学の根本問題』(1916 年)ですでに「感情移入」(20, *pass.*) という訳語がみられる。
9. ハモンドのエンパシーの定義は以下のとおりであるが、実際の分析時には同時代の個々のエンパシー理論に沿って考察している：“Empathy is about overcoming psychological distance and establishing intersubjective experience of other minds—which encompasses both cognitive and affective functions. To empathise is, essentially, to bridge psychological distance.” (9)

小説のエンパシー理論 I

10. 同時期に書かれたと思われる彼女の論文“Understanding Empathy”でも、説明の仕方を変えて同じ主張がみられる。
11. エンパシーが（単なる情動的な反応ではなく、それ自体）高度な認知プロセスであるという前提条件は、コプランが唱えるエンパシーの 3 大条件の一つである「他者本位の視点取得」並びに「自他区別」という条件の中に暗に織り込まれている、と考えることもできる。ここでは続く議論での「感情伝染」との差異化の説明のためにあえて提示した。
12. ここでは素直に「感情伝染」と訳したが、日本語においては、“emotional contagion”の“emotional”を「情動」と訳したり、“contagion”の部分を「伝播」や「感染」としたりする訳が見つかるなど、まだその訳語は研究者の間でも定まっていない。
13. 心理学分野での定義などは Hatfield et al. を参照。
14. 日本においては逐語訳的な「個人的苦痛」の訳語で定着してきているようなので本稿においてはそれに従うが、（続く部分で説明しているように、もともと他者のものであったネガティブな感情を自分ののものであると勘違いしてしまい、結果そのネガティブな感情に悩まされる、という概念なので）意味内容的には「私化苦痛」や「(他者の) 苦痛の私物化」とする方が明確かもしれない。
15. 「学問的に検証可能」というのは、彼女の理論は、哲学的にとりだけでなく、エンパシー研究が盛んな神経科学分野の知見も十分に取り入れているからである。例えば彼女は、エンパシーの 3 大条件で差異化した他の類似プロセス（感情伝染やシンパシー、自己本位の視点取得による疑似エンパシーなど）とエンパシーとの間の、神経プロセス的あるいは局所的な差異にも言及し、議論に組み入れている。
16. 彼女の 2004 年の論文 “Empathic Engagement with Narrative Fiction” を参照。
17. 彼女の 2006 年の論文 “Catching Characters’ Emotions Emotional Contagion Responses to Narrative Fiction Film” を参照。
18. ここら辺の事情は、Keen の *Empathy and the Novel* 第 2 章に詳しい。
19. “Catching” の 26 頁を参照。ここで言う「信念」(belief) は哲学分野における意味で使っている。また、現実と虚構での感情の差異（がないこと）について言及しているのは、哲学分野における「フィクションのパラドックス」(paradox of fiction) の議論を念頭に置いているためである。
20. Sato et al. を参照。
21. Gallese を参照。

引用文献

- Coplan, Amy. “Catching Characters’ Emotions: Emotional Contagion Responses to Narrative Fiction Film.” *Film Studies*, no. 8, Summer 2006, pp. 26-38.

- . "Empathic Engagement with Narrative Fiction." *Art, Mind, and Cognitive Science*, special issue of *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, vol. 62, no. 2, Spring 2004, pp. 141-152.
- . "Understanding Empathy: Its Features and Effects." *Empathy: Philosophical and Psychological Perspectives*, edited by Amy Coplan and Peter Goldie, Oxford UP, 2011, pp. 3-18.
- . "Will the Real Empathy Please Stand Up? A Case for a Narrow Conceptualization." *The Southern Journal of Philosophy*, vol. 49, 2011, pp. 40-65
- Feagin, Susan. *Reading with Feeling: The Aesthetics of Appreciation*. Cornell UP, 1996.
- Gallese, Vittorio. "The Mirror Neuron Mechanism and Literary Studies: An Interview with Vittorio Gallese." *California Italian Studies*, vol. 2, no. 1, 2010, escholarship.org/uc/item/56f8v9bv. Accessed 28 Feb. 2019.
- Hammond, Meghan Marie. *Empathy and the Psychology of Literary Modernism*. Edinburgh UP, 2014.
- Hammond, Meghan Marie, and Sue J. Kim. Introduction. *Rethinking Empathy through Literature*, edited by Hammond and Kim, Routledge, 2014, pp. 1-18.
- Hatfield, Elaine, Lisamarie Benson, Paul D. Thornton, Richard L. Rapson. "New Perspective on Emotional Contagion: A Review of Classic and Recent Research on Facial Mimicry and Contagion." *Interpersona*, vol. 8, no. 2, 2014, pp. 159-179.
- Keen, Suzanne. "A Theory of Narrative Empathy." *Narrative*, vol. 14, no. 3, Oct. 2006, pp. 207-236.
- . *Empathy and the Novel*. Oxford UP, 2007.
- . "Narrative Empathy." *the living handbook of narratology*, edited by Peter Hühn et al., Hamburg UP, 8 Mar. 2013, wikis.sub.uni-hamburg.de/lhn/index.php/Narrative_Empathy. Accessed 15 Feb. 2019.
- Sato, Marc, Marisa Mengarelli, Lucia Riggio, Vittorio Gallese, Giovanni Buccino. "Task Related Modulation of the Motor System during Language Processing." *Brain and Language*, vol. 105, 2008, pp. 83-90.
- "U.S. Trends in Arts Attendance and Literary Reading: 2002-2017." National Endowment for the Arts, Sep. 2018, www.arts.gov/sites/default/files/2017-sppapreviewREV-sept2018.pdf. Accessed 15 Feb. 2019.
- Wispé, Lauren. "History of the Concept of Empathy." *Empathy and Its Development*, edited by Nancy Eisenberg and Janet Strayer, Cambridge UP, 1987, pp. 17-35.
- 阿部次郎『倫理学の根本問題』岩波書店、1916年。

小説のエンパシー理論 I

竹内勝徳「まえがき」竹内・高橋勉編『身体と情動：アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』彩流社、2016年、1-10頁。

「平成25年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」文化庁、2014年、

www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kekka.pdf。2019年2月14日閲覧。

三島由紀夫『仮面の告白』（1949年）新潮文庫、2005年。